

# 『蜻蛉日記』上卷「数知らず」の贈答歌の真意

王 穎

『蜻蛉日記』上卷「二三」「かりの卵を十重ねて、愆子に贈る」段<sup>①</sup>に、夫兼家の妹である東宮（後の冷泉帝）女御愆子と作者との歌の贈答が記載されている。この歌の場面は、作者が卵の十重ねを卵の花に結び付け、手紙と一緒に愆子に贈ることを始めとして、愆子はそれに対して返歌を贈り、最後に作者の返歌をもってやりとりが終わるのである。

愆子 数知らず思ふ心にくらぶれば十かさぬるものとやは見る

作者 思ふほど知らではかひやあらざらむかへすがへすも数をこそ見ぬ

この贈答について、これまでの註釈書の説明を概観してみると、〈新編日本古典文学全集〉では『鳥の子』の歌（王注…「鳥の子を十づつ十は重ねとも思はぬ人を思ふものかは」）を踏まえて言う。たとえ卵を十重ねることはできても、思ってくれない人を使うことはできない、と歌に詠まれているが、このとおり卵は十重なった、それならば思ってくれない人を使うことだつてできるわけだ、の意となる。本歌をたくみに利用して、あなたは思ってくださいさもなくとも、わたしはあなたを思っているということをおもしろく述べた一種の遊戯的表現」とする。同様の解釈は（日本古典文学大系<sup>②</sup>）、『蜻蛉日

『蜻蛉日記新註釈』、『新潮日本古典集成』にも見られる。ただし、『蜻蛉日記全註釈』は愋子に「ひとふしひねった恨み言をいうのが作者の本意である」としているが、『日本古典文学大系』では「兼家との仲が『よに心ゆるびなき』苦しいはかない関係である事をその妹なる東宮御息所に訴える」としている。

右の諸注とまったく異なっているのは村井順の説である。村井は『かげろふ日記全評解』<sup>6</sup>において、卵を重ねることは「ひもでくれば誰にでもできることで、珍しいことではない」・「このように作者という女性性は、自分の作品を人に見せびらかしたがる人である」・「顕示欲の強い人なのだ」と解釈している。また、当時、宮中の物の怪がひどかったため、「愋子には、『かずしらず思ふ心』が絶えなかつたのだ」とし、したがって、「かずしらず」の愋子の歌を「数限りなく物思いのある私の心に比べてみますと、卵を十個重ねるぐらいは、物の数でもありません。」と訳し、作者の「思ふほど」の返歌を、「あなたは限りなく物思いがあると仰せですが、そのご心配の程度を知らなくては、かいがありません。返す返す数多くご心配していらっしやる内容を、お伺いしたいものです。」と訳している。

つまり、この段の歌のやりとりについては、「数知らず」の歌を「あなた（作者）を思う私（愋子）の心」と解釈し、「思ふほど」の歌を「私（作者）を思っているあなた（愋子）の心」と解説する説と、「数知らずの歌」を「数限りなく物思いのある私（愋子）の心」と解釈し、「思ふほど」を「限りなく物思いがあるあなた（愋子）の心」と解釈する説と、大きく分けて二つの説が行われていることになる。しかし、この段にあらわれる歌のやりとりは、この何れの説に従っても、どうも非常に唐突で、不自然な気がしてならない。

歌の解釈をする前に、まず「かりの卵を十重ねる」ということの意味を確認しておきたい。「かりの卵を十重ねる」ということは、一般的に中国の『史記』にある「累卵」の故事から来たと考えられている。『史記』<sup>7</sup>卷七十九の「范雎蔡澤列伝第十九」に「曰、秦王之国、危於累卵。得臣則安。」（訳：曰ふ、秦王の国は、累卵より危し。臣を得ば則ち安からん。）とあって、ここで「累卵」という言葉は、「危ないこと」のたとえとして使われている。しかし、日本に伝わってきてから、

どうも「累卵」の意味は変わってしまったようである。「累卵」の故事を踏まえたと思われる和歌は、『伊勢物語』と『古今和歌六帖』に収められている。

・『伊勢物語』第五十段<sup>8)</sup>

むかし、男ありけり。うらむる人をうらみて、

鳥の子を十づつ十はかさぬとも思はぬひとを思ふものかは

・『古今和歌六帖』第四上卷<sup>9)</sup>

とりのこをとをつゝとをはかさぬとも人のこゝろをいかゝたのまん（紀友則）

この二首の歌の意味は多少異なっているが、どちらも恋の歌であることは間違いない。そして、両方とも「鳥の子を十づつ十はかさぬとも」というふうに表示されている。ここから見ると、「累卵」という言葉は「危ういこと」のたとえではなく、「難しいこと」という意味に変わってしまい、そして、「鳥の子を十重ねる」という言葉は、当時の和歌の世界で一般的に「鳥の子を十づつ十はかさぬとも……」というふうに使われ、つまり、「なかなか難しいことができたとしても……」というような意味を表していることがわかる。もしかりにそうであれば、作者は「手まさぐりに」かりの卵を十重ねていた時に、「鳥の子を十づつ十はかさぬとも……」というふうと考えていたこともあり得ないことではないであろう。しかし、この「……」の部分には、作者のどんな気持ちが含まれているのであろうか。

作者が惣子とこの歌のやりとりを行った時の状況から考えてみると、その前の年、康保三年八月に、作者は夫の兼家と夫婦喧嘩をし、兼家は「端のかたに歩み出でて、幼き人呼び出でて、『われはいまは来じとす』など言ひおきて、出でける」ということがあった。その後、兼家はしばらくの間、作者の家から姿を消した。そのため、作者は兼家との関係を

一層はかなく思い、一緒にいても「胸つぶらはし」くなる一方であった。そして「かうものはかなき身の上」を神仏に訴えるために、稲荷と賀茂へ参詣したこともあった。その上さらに、その頃兼家はほとんど作者の家に訪れていないことも記事から窺える。

こういう状況において、作者は「手まさぐりに」かりの子を十重ね、それを惣子に贈り、そこから二人の歌のやりとりが始まったわけである。これらの要素を考えた上であらためて諸注をふり返してみると、〈大系〉の説に一理があるのではないかと思われる。つまり、夫との関係を考えながら、「手まさぐり」にかりの卵を十重ねていた作者は、「鳥の子を十重ねることが出来るとしても、あの人は私のことを思ってくれるはずがないだろうよ。人の心は本当に頼りにならないものだなあ」と自分の身の上を悲しんでいた。したがって、卯の花に結び付けた十重なつたこのかりの卵といっしょに、作者は自分の寂しい・悲しい・はかないというような複雑な気持ちを兼家の妹惣子に伝えようとしたのではないかということである。

しかし、なぜ相手が惣子なのであろうか。『尊卑分脈』等によると、惣子は兼家の妹であり、冷泉天皇が皇太子である時の御息所であるが、冷泉天皇即位後の安和元年十二月七日、御匣殿となったことがわかる。つまり、惣子は作者の夫兼家の妹であり、冷泉天皇の妃でもある。さらに、『公卿補任』等によると、兼家は康保四年二月五日春宮亮で、六月十日藏人頭となったことがわかる。つまり、兼家は冷泉天皇に側近として仕え、冷泉の即位とともに昇進したことが窺える。これらの事実を踏まえて考えると、兼家と兄妹・主従の二重の関係を持っている惣子は、兼家と作者の関係をよく知っている可能性が非常に高いことが推測できる。また、兼家がその頃ほとんど作者の家に訪ねていないことは前述した通りである。しかし、当時東宮の御息所たる惣子なら、東宮の側近に仕えている兼家のことを詳しく知っているであろう。そこで、作者は卯の十重ねを惣子に贈り、自分の気持ちを惣子に伝えようとしたのではないか。東宮の御息所にもなれた人であるから、「鳥の子」の十重ねの意味がよくわかるに間違いない。その上、作者と兼家のこともよく知っている以上、作者の気持

ちをとっさに見抜いたに違いない。

ならば、作者の気持ちに依えて贈られた惣子の「数知らず」の返歌は、「あなたを思っている私の気持ちに比べますと、十個重ねた卵など物の数ではありません」というふうに解釈されるのが妥当であろうかと疑わざるをえない。この頃の作者は兼家との関係をはかなく思い、不安の気持ちでいっぱいであることは前述の通りである。こういう状況下における女にとつて、最も望んでいるのは「友人の思い」というよりも「相手の男の思い」であろう。同じ女の身であり、さらに作者の状況もよく知っている惣子が、作者の望んでいるものがわからないわけがない。したがって、ここで大胆に推測させてもらえば、「数知らず」の歌で一見惣子は「あなたを思っている私の心」を言っているように見えるが、本当は「あなたを思っているあの人（兼家）の心」を言っているのではないか。同じように、「思ふほど」の歌で、作者は「あなた（惣子）が私を思っているほど」と言っているというよりは、「あの人（兼家）が私を思っているほど」と言っているのではないかつまり、この歌のやりとりの中で、惣子は兼家の代弁者として登場し、作者の気持ちを受け止め、それに依って返歌を贈ったという解釈があり得ると思われる。

「いくらこんなふうによくかりの卵の十重ねができたとしても、あの人是我はわたしのことを思ってくれるはずがないであろう。人の心って本当にあてにならないものだなあ」（この場合、踏まえた歌の下の句は「人の心をいか頼まむ」と悲しみながら、作者はこの卵の十重ねを卵の花に結びつけ、惣子に贈った。それに対して惣子は「数限りなくあなたのことを思っているあの人（兼家）の心に比べますと、十個重なった卵など、物の数ではありません。あの人（兼家）の御好意とは桁違いですよ」という返歌を贈り、「そんなこと（あの人があなただけを思っていないこと）なんてありませんことよ。あの方はあなたのことをとても大事に思っていますわよ。」と作者を慰める。それに対して作者は「あの方はどのくらい私のことを思っているのか私にはわかりません。それがわからなければ何の意味もありません

せん。あの人が数限りなく私のことを思っているとおっしゃるなら、くれぐれもその程度（証拠）をお示しいただきたいですね」というような歌を返した。

もしこういう説が成り立つならば、全体的な流れから見ても、唐突感が少なくなり、もっと自然になる。そして、作者の心理的狀況および惣子との關係から考えても、こういう解釈はより女心に近づいていると言えるのではないだろうか。

注

- (1) 本稿における『蜻蛉日記』本文引用は、〈新編日本古典文学全集〉（木村正中・伊牟田経久校注・訳、小学館、一九九五年一月）による。節の数及び見出しも同書による。
- (2) 〈日本古典文学大系〉『蜻蛉日記』（川口久雄校注、岩波書店、一九六五年一月）。
- (3) 『蜻蛉日記全註釈』（柿本奨著、角川書店、一九六六年八月）。
- (4) 『蜻蛉日記新注釈』（大西善明著、明治書院、一九七一年一月）。
- (5) 〈新潮日本古典集成〉『蜻蛉日記』（犬養廉校注、新潮社、一九八二年一月）。
- (6) 『かげろふ日記全評解』（村井順著、有精堂出版、一九七七年一月）。
- (7) 『新訳漢文大系 第89巻 史記九（列伝二）』（水沢利忠著、明治書院、二〇〇〇年一月）。
- (8) 〈新編日本古典文学全集〉『伊勢物語』（福井貞助校注・訳、小学館、一九九四年一月）。
- (9) 『校證 古今和歌六帖（下）』（石塚龍磨稿・田林義信編、有精堂出版、一九八四年四月）。

（おう・えい／南京師範大学大学院学生・本学交換留学生）